

山崎孝明〔著〕

当事者と専門家

——心理臨床学を更新する

A5判並製・金剛出版

2024年8月刊

定価3,740円（税込）

評者＝川畑直人（京都文教大学）



本書は、前作『精神分析の歩き方』で注目を集めた山崎孝明氏の2冊目の単著である。前著が日本における精神分析の未来への憂慮を執筆動機としていたのに対し、本書ではその視点が心理臨床界全体に広げられている。

読んでまず感じたのは、一貫してパーソナルな視点を基軸に据えた著者の姿勢だ。個人的な視点に立つため、全体像を見落とす危険性は否定できないが、その分、問題意識は純度を高め、より鮮明に表出されている。たとえるなら、学会後の非公式な場で意気盛んに語られる話題が、慎重な論考を経て著作として示される感覚である。その内容は共感を呼ぶ一方、一部の人のにとっては煙たく感じられるかもしれない。

本書前半では、「心理臨床学を更新する」という標題のもと、この業界の構造的な問題に焦点を当てる。「純金コンプレックス」というキーワードで、専門家間の分断や大学と現場の乖離が分析されている。この問題には評者もかねてより関心を抱いており、2008年の拙稿では、定義の曖昧な傾聴カウンセリングを、「ロジャリアンベースのユングアンフレーザーの実はフロイディアン」的な和風カウンセリングと名付け、その中で根拠不明な「教え」が金科玉条と化し、現場の臨床心理士を不自由にしていることを指摘した。この状況が依然として継続している現実を踏まえると、本書が世に出る意義は非常に大きい。

後半では、スクールカウンセリングやオンライン面接など、著者の実践に基づく考察が展開される。特に印象的だったのは、父親に連れられてきた男子生徒への対応である。母親を苦しめる行動を非難する父親に対し、著者は「被害者は男子生徒ではないか」と明言する。この一言が、生徒の人生に大きな支えとなった点は深く心を打つ。

こうした場面は日常の一コマでありながら、まさに奇跡の瞬間と言える。著者が提唱する「領域の知」の

体系化とは、そのような事象の「再現」や「意図的生起」は不可能であっても、「認識」が可能となるような理解の枠組みや、「生起」を目指した条件を整える方法論を構築することであるのかもしれない。このテーマは、日本の臨床心理学の歴史の中で細々と受け継がれてきたものでもある。戸川行男氏が日本臨床心理学会創設時に執筆した文章で、心理学の延長としての臨床心理学ではなく、現場の知を集約することで構築される心理学的臨床を唱えた背景には、大学における臨床心理学の定着が遅れた日本において、独自の臨床心理学を創設するという構想があったのだろう。日本心理臨床学会という名称にはその理念の痕跡を窺うこともできるが、一般には臨床心理学との区別は明確ではない。

心理臨床学を掲げる山崎氏の論考が、議論の発展と深化を促す起爆剤となることを願ってやまない。